

## 北朝鮮核実験(J-Wave)

日時：2013年1月28日

マスコミ：J-Wave 07:00～、別所哲也からインタビュー。

アメリカのジョンホプキンス大学コリア研究所が北朝鮮の豊溪里にある核実験場の最新の衛星写真を公開し、早ければ2週間から3週間以内に核実験が行える体制づくりが進んでいる、と分析しました。北朝鮮の国防委員は「核実験とミサイル発射の標的はアメリカ」と明言。

一気に国際関係の緊張が高まっています。

### <質問1>

【別所】 「北朝鮮がアメリカを標的にしている」と明言した背景にはどんな理由があるのですか？

【川上】 3つほど理由があります。

第一は、国連安全保障委員会の政策決議および米国の措置に反発したこと。

米国政府が昨年12月の北朝鮮の長距離弾道ミサイル発射に対して、国連安保理決議違反（安保理決議1718－2006年、1875－09年）とし、1月22日に現行制裁強化案を提出、採択されました。それに基づき、米政府は、1月24日米経済制裁で北朝鮮銀行員2人と香港商社の資産を凍結するとともに、米国民との接触も禁止した。それに対して北朝鮮は反発したわけです。

第二は、北朝鮮は、第二期オバマ政権と二国間交渉をしたいという意志があります。それにスタートしたばかりのオバマ第二期政権の反応をみる目的です。北朝鮮の場合は交渉をしたい場合は、必ず、ミサイル発射や核実験を行っています。また、過去2006年に北朝鮮が1回目の核実験を行った際にはブッシュ大統領は北朝鮮との二国間交渉に応じています

第三は、北朝鮮の国家安全保障確保のためです。北朝鮮はICBM保有確保したい、米国にとどく核弾道ミサイルを保有したいと思っています。その根底には、北朝鮮が米国からの核の脅しに対する核抑止を持ちたいという強い意志がある。これは過去に中国が核を保有したのをお手本としてい

### <質問2>

【別所】 実際に核実験が行われる見通しはいかがでしょうか？

【川上】 高いと考えられます。

第一の理由は、北朝鮮は過去に2006年10月と2009年9月に核実験をしていますが、それはミサイル実験をしたやっただけにしています。さらに、これまで北朝鮮の2度の核実験が予告後1か月以内に実施されています。

第二の理由は、過去二回の実験はプルトニウムが使われたが、今回は、高濃縮ウランの実験ではないかと考えられます。プルトニウム生産を行っていた寧辺核施設（ニョンビョン）は一度破壊し、また稼働していると報告されていてプルトニウム型核も生産できるが、技術的に小型化は難しい。また、時間がかかります。

これに対して、北朝鮮は天然ウランの宝庫で推定埋蔵量は400万トンといわれ、世界でも最も採掘規模が大きいオーストラリアを凌駕するため将来的には有望です。高濃縮ウランの方が小型化も簡単だと言われています。

第三の理由は、核保有を金総書記の遺産とみなしているため、金正恩体制基盤固めのためにも核実験は必要です。そのため金総書記の誕生日(2月16日)前に実施する可能性も排除できません。

### <質問3>

【別所】 アメリカの対応を含め、今後、どのような展開になると考えられますか？

【川上】 3つの点が示唆できると思います。

第一は、米国の出方。2期目に入ったオバマ政権は北朝鮮との交渉の機会を模索しており、核実験が強行されれば対話の機会が遠のいて政権2期目の出鼻を挫かれるため、中国を通じて北朝鮮に核実験の自制を強く働きかける見通しでしょう。特に、第二期オバマ政権で指名された国防長官チャック・ヘーゲルや国務長官ジョン・ケリーは北朝鮮の宥和路線を持つと言われていますが、北朝鮮が核実験をした場合には核実験は逆効果となるでしょう。

もし、北朝鮮が今回の核実験で米国まで届く ICBM を保有することになるとすれば、また、米中関係が冷えれば、後、米議会の中で北朝鮮への先制攻撃論が再びでてくる可能性があります。

第二は、中国の出方。今回初めて、中国は北朝鮮の核実験に対して強い反対をした。これは米国に対する中国のメッセージで、北朝鮮への強硬姿勢を示すことで第二期オバマ政権と米中関係宥和のメッセージだと考えられます。北朝鮮への制裁強化に関する国連安保理の決議採択に難色を示していた中国は、最終的に賛成したことについて朝鮮半島情勢の緊張回避を意図したものと強調しています。

第三は、北朝鮮問題は、米中の相関関係でさまる。米中宥和がすすめば、また、北朝鮮が核実験をあきらめれば6カ国協議再開となるでしょう。中国は「対話と交渉を通じた平和的解決の希望を発するとともに6カ国協議再開を呼びかけており、全体としてバランスが取れている」と評価した。秦局長はまた、「朝鮮半島の非核化と北東アジアの長期的安定を実現するには6カ国協議が有効なメカニズムだ」と述べています。

(文責：川上)